

溶液を注ぎ、チャックを閉めて沸騰中の鍋に10分程度入れます。その後よく硫酸銅溶液を水で抜いて、海藻おしびにします。この銅置換を半年前に実施した時の作品は、きれいな緑色を未だ保っています。紅藻でも退色がおきますが、クロロフィルが分解されると逆に赤色が鮮やかになっていくため、それほど問題はありません。2年半経過した作品でも、やや淡くなっていますが赤色を保っています。褐藻も種類によっては退色しますが、銅置換をすると緑色になってしまいますので、この方法は使えません。退色の程度は種類によって異なりますので、退色しにくい種類の褐藻を使用することを推奨します。退色しにくい種類は黒みをおびた濃い色彩の褐藻が多く、逆に淡い色彩の種類は退色しやすい傾向にあります。アミジグサとサナダグサで例えると、色の濃いサナダグサが適しており、色の淡いアミジグサが退色しやすいというイメージです。いずれにしても、直射日光が当たる場所に置くと、どの色でもより早く退色が進むと思いますので、日当たりのよい場所は避けたほうが無難です。

私は以上のような要領で作品を作り、机の上などに飾っています。最近では容器も100円ショップ等で販売され始めてきましたので、簡単に入手できます。また、私は海藻を扱う食品会社に勤めているため、きれいな海藻を比較的入手しやすい立場にあることも幸いです。海藻ハーバリウムを見ながら仕事をすると、非常に癒されてとてもはかどりますし、プ



図3. いろいろな容器に色とりどりの海藻を入れて、自分だけの海藻ハーバリウムを作ることができます。

レゼントとしても喜ばれています。もう既に製作している方もおられるかもしれませんが、まだの方は案外簡単に作れますので、是非作ってみてはいかがでしょうか？

(理研食品株式会社)



カモガシラノリ語源異説

仲田 崇志・鈴木 雅大

カモガシラノリなる紅藻類がある。一部の地域では食用にされるそうだ。この和名には「鴨頭海苔」の字があてられるが、その語源には謎がある。「カモガシラノリの謎—地方食用海藻の魅力—」(北山 2020. 海洋と生物 251: 543-546)で語源が議論されていて、干潮時に見える群落の姿を「鴨の頭」に見立てたとする仮説が紹介されている。「鴨の頭」と言われてみればそう見える気もするが、その名を知らずに鴨の頭(なぜ鴨?)を連想するものなのだろうか、今一つすっきりしない。

そこで、「鴨頭」に別の意味がないものかと調べてみると、「鴨頭(こうとう・こうと)」なる言葉があるそうだ。本来は「香頭」と書き「鴨頭」は当て字とされるが、これが吸い物などに入れる薬味を意味するらしい(『日本国語大辞典 第2版』など)。カモガシラノリは吸い物にも入れるので(陶山 1890. 『有用藻譜』; 遠藤 1911. 『海産植物学』など)、「鴨頭にする海苔」から読みを転じてカモガシラノリが生まれた、という語源説はどうだろうか。誰とも知れぬ昔の名付け親に正解を聞くこともできないが、いくぶんか洒落た異説ではなかろうか。



福岡県津屋崎の潮間帯で撮影したカモガシラノリ